

『拾遺和歌集』の副助詞ダニ

——平安朝和歌における〈相対的軽少性〉の意義の一確認(其二)——

田 中 敏 生

【論文概要】拾遺和歌集からダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的軽少性〉に求めるといふ観点から、そのふるまい方を記述する。その際、ダニの用いられる環境を、①願望表現、②仮定条件句、③否定表現、④類推表現の四つに大きく分かちながら見て行く。それによつて、〈相対的軽少性〉の意義が総ての用例を通じて発揮されているありさまを観察する。併せて、群数性と程度量性とを二つながら備えるという意味での、この語の副助詞性をも確かめる。

【キーワード】拾遺和歌集 副助詞 ダニ 相対的軽少性 群数 程度量

はじめに

本稿は、『拾遺和歌集』から副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的軽少性〉に求めるといふ観点から、そのふるまい方の記述を試みるものである。

ダニの基本的意義を「小」の側で捉えることは古くから行なわれているし、この語が複数の用法を持つことも早くから指摘されている。こうした研究の流れを前にしてなすべき事柄の一つは、基本的意義に基づくこの語の統一的な理解を目指すことであり、そのためには〈相対的軽少性〉の意義を立てることが有効であろう。即ち、ある文中でダニが使われるとき、その接する語句が、想定される他の要素に較べて相対的に小さな要因であることを示すことで様々な用法を統一的に捉えることができるのではないか——そういった考え方から、これまで蜻蛉・枕・大鏡・今鏡と

いった散文作品や万葉・古今・後撰といった和歌について用例を見てきたが(文献⑥⑪⑫)、ここではさらに拾遺集に材を取りつつ、同様の観察を試みたい。それによつて、この語の使用実態の解明をいささかなりとも押し広げることができればというのが本稿のねらいである。

以下本稿では、右のような考え方にに基づきながら、ダニの用いられる環境を次のように分けた上で、そのふるまい方を見てゆくが(注①)、それは、群数性と程度量性とを兼ね備えるという意味での副助詞性(注②)を、この文献での用例に即して確かめる作業ともなるであろう。

- (1) 願望表現で用いられるもの 一一例
- (2) 仮定条件句で用いられるもの 三例
- (3) 否定表現と共に用いられるもの 二三例
- (4) 類推表現に用いられるもの 一五例

〔計 五二例〕

一 願望表現・仮定条件句

願望表現と共に用いられたダニは十一例見える。一般に願望表現とともにダニが用いられる場合、ダニは、その接する語句が想定される高い段階から大きく引き下がったものであることを示し、そのことによって、「せめてもの願い」を表わすのに参加すると考えられよう。文献③（三七頁・四〇頁）にいわゆる「最低限願望」の使われ方である。〈相対的輕少性〉の意義が、そのような形で發揮されると言えよう。

これらの用例は、願望を表わす形の面から次のように分けておくことができる。

- | | |
|------------------|----|
| 1…命令形によるもの | 一例 |
| 2…「む」「じ」によるもの | 四例 |
| 3…「なむ」「てしか」によるもの | 四例 |
| 4…その他のもの | 二例 |

〔合計 一一例〕

第一に、命令形とともに用いられたものは、次の一例である。

①惜とて留まる事こそかたからめ我が衣手を干してだに行け

（別・三三九、不知）

①は、「別れずにここに留まってくれることが何よりだが、それが叶わぬなら、せめて私の袖だけでも乾かしてから行ってほしい」といった意味を詠み込んでいる。別れずにすむことと袖の涙を乾かすことを較べた場合、望ましきの度合いにおいて後者は格段に劣る。ダニはそのような要素の輕少要因性を明示しつつ命令表現と組み合わせることによって、「せめてもの願い」を表わすものとなっている。〈相対的輕少性〉の意義がそのように發揮されるわけである。

第二に、助動詞「む」「じ」とともに用いられたものとして、次の四例がある。

〔む〕

②年の内はみな春ながら暮れなん花見てだにもうき世過ぐさん

（春・七五、不知）

③いかでかはかく思てふ事をだに人づてならで君に知らせむ

（恋一・六三五、敦忠）

④恋わびぬ音をだに泣かむ声立てていづこなるらん音無の里

（恋二・七四九、不知）

〔じ〕

⑤（……）緑の衣（「六位の衣」）脱ぎすてむ 春はいつとも しら浪

の 浪路にいたく 行きかよひ ゆ（「ふなゆ」）も取りあへず なり

にける 舟の我をし 君知らば あはれ今だに 沈めじと 海人の釣

縄 うちはへて 引くとし聞かば 物は思はじ（雑下・五七一、源順）

②は、「二年中が春であればよい、そうすれば、このいやな世の中をせめて花を眺めてなりとも過ごせるから」といった意味が詠まれている。「辛さを感じずに済む世の中であればいちばんよいが、それがだめなら」の余意が感じ取られる。ここでもダニは、せめて慰めとなりそのような要素を提示するのにはたらいっていると言えよう。

③は、後撰集（恋五・九六一）にも収められた歌である（文献①、八九頁。但し、初句は「如何して」。また末句「君に語らん」。そこでの詞書は《忍びて御匣殿の別当（「仲平息女明子」）にあひ語らふと聞きて、父の左大臣（「仲平」）の制し侍ければ》というものであった。逢えることがいちばんいいことではあるが、それが叶わぬなら、せめて思いを直接伝えるところとすることができる。そうした願望の序列の中で、相対的に低いほうの要素を示すのにダニが用いられているわけである（注③）。

④も同様である。「恋の思いの遂げられるのが最上だが、それが叶わぬならせめて声を立てて泣くということだけでもしたい」といった歌意であるが、ここでもダニは、願望の序列のなかで望ましさをより少なくしか備

えない要素を示すのに用いられていると言えよう。

⑤は、詞書に《身の沈みけることを嘆きて、勘解由判官にて》とある長歌の、末尾の一節である。源順集（一一八）の詞書には《応和元年（一一九六一年）、勘解由判官の労六年、いにしへにならずふるに、かくしづめる人なし、つかれたる馬のかたをつくりて、つかさの長官朝成朝臣にたまふに、くはへたるながうた》とある。源順（九一一―九八三）が五十一歳のときに、身の不遇を嘆きつつ援けを訴えた歌である。ダニの関わる部分は「（これまでは致し方ないとして）せめて今だけでも沈めまいと」の意であらう。「じ」に備わる意志の意味と関わって、最低限願望の意味を表わすのに用いられていると言えよう（注④）。

第三に、終助詞「なむ」「てしか」とともに用いられたものが四例見える。

〔なむ〕

⑥我が宿の八重山吹は一重だに散り残らん春の形見に

（春・七二、不知）

⑦涙河のどこにだにも流れ南恋しき人の影や見ゆると

（恋四・八七五、不知）

⑧数ならぬ身は心だになから南思知らずは怨ざるべく

（恋五・九八四、不知）

〔てしか〕

⑨夢をだにいかで形見に見てし哉逢はで寝る夜の慰めにせん

（恋三・八〇八、人麿）

⑥は、山吹を惜しむ歌である。第三・四句は、「散らずに残ってくれるのがいけばんよいが、それが叶わぬなら、せめて一重だけでも」の意であらう。「一」が小さな要素であることについては、こと新しく説く必要もなからう。十全な望ましさから大きく引き退いた要素を提示するのに、ダニが用いられているわけである。

⑦は、「涙を流さずにすめばそれが何よりであるが、それが叶わないなら、せめて静穏な心地で泣くことができるばよい」といった意味を詠み込んでいる。ここでもダニは、望ましさにおいてより低い段階の要素を示すにはたらいっている。

⑧は、「忘れられても仕方がないような数にも入らぬ私であつてみれば、せめて心だけでも無いのであつてほしい、そうであれば相手の思いを知ることなく、だからまた恨むこともなくてすむだろうから」といった趣旨の歌である。自分がひとかどの存在であればそれに越したことはないが、それが叶わないなら、せめて恨まなくて済むように、心をなくしてしまいたい——そうした願望の序列の中でダニが用いられている。

⑨は、「せめて夢をだけでもなんとかして形見に見たいものだ。逢えなくて寝る夜のなぐさめとして」といった趣意の歌である。「実際に逢えるのが何よりのことだが」の余意が読み取れよう。ダニがより小さな要因を示すところから、そうした意味合いもまた生じてくるわけである。

第四に、次のようなものも、願望表現で用いられたダニの例として受け止めておくことができる。

〔べし〕

⑩我が袖の濡る、を人のとがめずは音をだにやすく泣くべき物を

（恋四・九一七、不知）

〔省略表現〕

⑪（……）袂そほつに 身をなして 二春三春 過しつ、 その秋冬の

朝霧の 絶え間にだにも と思しを 峰の白雲 横ざまに 立ちかはりぬと 見てしかば（……）（雑下・五七四、兼家）

⑩は、「自分の袖が濡れるのを人が見とがめないなら、せめて存分に声を出して泣くことができるのだが」といった趣意の歌である。④とよく似た意味が詠み込まれている。「べし」は可能を表わすと見ておいてよいかと思われるが、実際にはなしえない事柄をめぐって、ある仮想された条件

のもとで、その可能性に思いを馳せるところから、「それができればよいのに」といった願望的な意味合いもまた生じてくると考えられよう。ダニもまたこうした環境のもとで、自身の意義を発揮しているわけである。

⑪は、詞書に《円融院御時、大將はなれ侍て後、久しく参らで奏せさせ侍ける》とある。康保四年（九六七年）、兄の為平親王を差し置いて守平親王（後の円融帝）が立太子したとき、兼家は藏人頭となって東宮権亮を兼ねたが、いざ円融天皇が即位したとき（安和二年＝九六九年）摂政となつたのは実頼であり、次いで長兄の伊尹であった。天禄三年（九七二年）にその伊尹が亡くなると、次兄の中納言・兼通が関白となる。大納言であった兼家を飛び越えての昇進であった。さらに天延二年（九七四年）、兼通が病の床に倒れたとき兼家は兼通邸の前を素通りするが、屈辱を感じた兼通は病を押して参内し、関白を頼忠に譲り、兼家から右大將を取り上げて従兄弟の済時（師尹息）に与え、兼家は治部卿（治部省の長官）に左遷される（注⑤）。およそこういったゆくたての中で、この長歌は詠まれている。所掲部分の「袂そはつ（濡つ・案山子）に身をなして」は、円融帝の補佐役として実頼や伊尹が摂政や関白になったことを指し、「朝霧の絶え間云々」は伊尹の亡くなった時のことを言うとされる。長らく待たされたあげく、せめてその時は自分に関白の地位がめぐって来ると思ったのに、兼通に邪魔をされたとの趣意であろう。ここでもダニは、「それまでの雌伏はやむを得ないとしても」といった含みを伴って用いられていると言えよう。

こうして、願望表現と共にあつてダニは、その内容を低い段階へと引き下げることに於いて「せめてもの願い」を表わすのに参加しているありさまが觀察されるであろう。「相対的輕少性」の意義もまた、そのような形で發揮されるわけである。

他方、仮定条件句と関わるダニは三例見える。一般に仮定条件句の中で用いられる場合、ダニは、後件成立のための要件が、想定されるより高い

段階から大きく引き下がったものであることを示し、それによって、最低段階といつてもよいような小さな要件でも十分に後件が成り立つことが表わされる。そうした意味で「最低十分条件」の構成に与ると言つてよいであろう。「相対的輕少性」の意義がそのような形で供されるわけである。

① いかにしてしばし忘れん命だにあらば逢ふのありもこそすれ
（恋一・六四六、不知）

② あはれとし君だに言はば恋ひわびて死なん命も惜しからなくに
（恋一・六八六、源經基）

③ しばしだに蔭に隠れぬ時は猶うなだれぬべき撫子の花
（雑春・一〇八〇、贈皇后宮）

①は、恋の苦しみを忘れて生きながらえることで逢瀬に期待をつなぎたいむね詠んでいる。下三句は、「生きてさえいれば（それだけで十分に）逢う機会も見込まれよう」の意であろう。この世の様々な幸福や欲求を捨て去つて、命が消えずにあるというただそれだけのことを要件として持ち出すのにダニが用いられている。死んでしまえば可能性はゼロだが、そうでさえなければといった気味合いであろう。そうした最低限の条件を形作るのに「相対的輕少性」の意義が用いられているわけである。

②は、「あなたが『かわいそうだ』と言つてくれるなら、それだけでも十分に、死んでも惜しくなくと思える」との意であろう。ここでもダニは、後件成立の要件を最低限ともいふべき段階へと引き下げるのにはたらいっていると言えよう。

③は、詞書に《一条摂政の北方はかに侍ける頃、女御と申ける時》とある。伊尹の妻（恵子女王）に対して、娘の懷子が冷泉院の女御であつたときに贈つた歌である。「ほんの暫くでもあなたの庇護がないときには、（心も滅入つて）うなだれてしまひそうなあなたの娘でございます」といった意味合いを詠み込んでいる。「しばし」の輕少要因性は明らかであろう。係り先は「く時は」であつて接続助詞「ば」は見えないが、「時」によつ

て場合を設定するところから、結果的には仮定条件句に準じうる意味が形成されていると言えよう。「蔭に隠れぬ」ということが、ほんの「しばし」の間であっても、（それだけでも間違いなく）心くずおれてしまうということであつて、そうした意味で、最低十分条件的な意味が形作られているわけである。

こうして、仮定条件句にあつても、ダニは、最低十分条件の構成へと向けて「相対的輕少性」の意義を発動しているありさまが認められるであろう。

二 否定述語

否定述語とともに用いられたダニは二十三例見える（なし、で、じ、反語などによるものもここに含めた）。否定述語で用いられる場合、ダニは、それをしも斥けるものとして「小」なる要素を提示する役割を担うが、文全体としては、それと否定とが組み合わさることによって「皆無性」を表わすことになる。そのような形で「相対的輕少性」の意義が発揮されるのだと言えよう。以下では、ダニの接する語句がどのような意味で輕少要因性を帯びるかに留意しつつ、用例を見て行く。

第一に、次のような例にあつては、ダニの接する語句の意義自体から、その輕少要因性を認めることができる。

へ直接性

〔夢〕

① 恋しきを何につけてかなぐさめむ夢だに見えず寝る夜なければ

（恋二・七三五、順）

〔露〕

② 露だにもなからましかば秋の夜に誰とおきゐて人を待たまし

（恋二・七七四、不知）

〔ただ〕

③ 数ならぬ身はたゞにだに思ほえでいかにせよとかながめらるらん

（恋四・九一八、小馬の命婦）

へ間接性

〔しるし〕

④ 世の中はいかゞはせまし茂山の青葉の杉のしるしだになし

（雑恋・一二三六、不知）

〔形見の子〕

⑤ 如何にせん忍の草も摘みわびぬ形見と見えしこだになければ

（哀傷・一三二〇、不知）

〔たより〕

⑥ 我はむなしき 玉梓を 書く手もたゆく 結び置きて つてやる風の便だに なぎさに来ゐる 夕千鳥（雑下・五七三、不知）

①は、「現実はおろか、夢で逢うことだけでも望めない」といった筋合いを詠み込んでいる。夢（で逢うこと）と現実（で逢うこと）とを較べた場合、「夢」のほうがその満足度において格段に低いものであることは細かく論ずるに及ぶまい。ダニは、その低いほうの要素を提示するのにはたらいっている。文全体としてはそれが否定と組み合わせることによって、「慰めの皆無性」を表わすことになる。へ相対的輕少性」の意義が、そのようにはたらくわけである（注⑥）。

②は、仮定条件句で用いられているが、「なし」との関わりのほうが第一義的であろう。古今（五〇二）の《あはれてふ言だになくは》もよく似た使われ方をしている。歌意は、「露というものがあるから、来ぬ人を待つ間も辛うじて起きていることができるのであつて、もし仮にたったそれだけのものもないとしたら、とてもそうは行かない」といったものである。〔露〕という語が「小」なるあり方を帯びることについて、くどくだしく説く必要はなからう。ダニは、そのことを明示しつつ「なし」と組み

合わさることで、「依り縋るよすがの皆無性」を表わすのにはたらくと言えよう。

③は、詞書に《元良の親王、小馬の命婦に物言ひ侍ける時、女の言ひ遣はしける》とある。「数ならぬ身は人並みとさえも思えない（人並み以下としか思えない）のに、いたいそれをどうしようというので、もの思いに耽つてしまふのだらう」の意であらう（注⑦）。「ただ」は、『かざし抄』（文献④、一四六頁）に《里に『何モナシニ』『ナンノ事ナシニ』『外ナシニ』など言ふ》とあるように、特別な事情の何ら加わらないことを言う語である。この歌の場合は、「数ならぬ身」ということと響き合つて、「ごく人並み」の意と取ることができよう。ダニは、そのような要素に接することとで「重要度の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

④は、恋の希望の見出せないことを詠み込んでいる。「杉のしるし」は、古今（九八二）の《わが庵は三輪の山もと恋しくは訪ひきませ杉たてるかど》をふまえるとされる。「しるし」が、本体的なものを奥に潜めての「表面的な現われ」であることを思えば、その輕少要因性は説かずして明らかであろう。ダニは、古歌に即して考えれば、訪ねてゆくための「手掛かりの皆無性」を表わすことになるであらうし、「茂山の」以下を序詞ふうに取りれば、恋の進展をめぐる「積極的な見通しの皆無性」を詠んだものとなる。〈相対的輕少性〉の意義において、それがなされるわけである。

⑤は、詞書に《妻亡くなりて後に、子も亡くなりける人をとひに遣はしたりければ》とある。妻子ともに居なくなつた人の悲しみを詠んでいる季吟の抄でも引照されているように、「形見の子（籠）」と「忍ぶ草（を摘む）」との取り合わせは、後撰の次の歌に見える（雑二、一一八七。文献⑪、一二―三頁）。

・結置きし形見のこだになかりせば何に忍の草を摘ままし

（兼忠朝臣母の乳母）

「形見の子」の不在は、後撰では仮定されているに過ぎないが、拾遺では

現実のものとなつてゐる。妻が無事でいてくれれば最上であるが、それが叶わなくても、忘れ形見の子供のいることがせめてもの慰めだったわけだが、それさえも今は身まかつたので、耐え忍ぶ由もない——そういった状態が詠み込まれている。本人に較べれば、その忘れ形見となる人が輕少な存在であることは、こと細かく説くに及ぶまい。ダニもまた、そのような要素を掲げ示すことによって、「慰めの皆無性」を表わすのに参加していると言えよう。

⑥は、詞書に《ある男のものの言ひ侍ける女の、忍びて逃げ侍て、年ごろありて消息して侍けるに、男の詠み侍ける》とある長歌の一節である。この部分では、女が逃げ去つたあと、関係修復の便宜を欠いたままに思い屈していたことを述べている。掛詞を用いているが、實質は「便だに無し」であり、手紙を届ける手立てもないことを表わしている。そもそも手紙というものが直接に意思疎通をすることの代替手段であるのに、それを送り届けるということの、その手段さえも見出だし得ないというのが、ここでの趣意であらう。そうした意味で、ここでの「たより」は二重の間接性を帯びているわけであつて、ダニもまた、その輕少要因性を明示するのにはたらいっていると見えよう。それによつて、最終的には「交渉の絶無性」が表わされるに至るわけである。

第二に、左に掲げるような例にあつても、ダニの接する語句は、歌全体の意味を汲めば、やはり輕少要因性を帯びることが知られる。

①津の国の堀江の深く思ふとも我は難波のなにとだに見ず

（恋四・八八三、不知）

②さ牡鹿の爪だにひちぬ山河のあさましきまで訪はぬ君哉

（恋四・八八〇、不知）

③さもこそ逢ひ見むことのかたからめ忘れずとだに言ふ人のなき

（恋五・九五一、伊勢）

④我こそはにく、もあらめ我が宿の花見にだにも君が来まさぬ

(雑恋・一二六一、伊勢)

⑤夕占問ふ占にもよくあり今宵だに来ざらむ君をいつか待つべき

(恋三・八〇七、人麿)

⑥秋萩の花も植ゑ置かぬ宿なればしか立ち寄りむ所だになし

(雑恋・一二三三、不知)

⑦あさましや見しかとだにも思はぬに変わぬ顔ぞ心ならまし

(恋五・九四九、不知)

⑧人にだに知らせで入りし奥山に恋しさいかで尋ね来つらん

(恋四・九一四、不知)

⑨事ぞとも聞きだにわかずわりなくも人のいかるかにげやしなまし

(物名・四二〇、躬恒)

⑩君が世を長月とだに思はずはいかに別のかなしからまし

(別・三〇九、村上天皇)

①は、相手にまったく関心の湧かないことを詠んでいる。この場合「なに」は、所謂「不定語」であり(文献①)、心に思い浮かぶ事柄一般を、これと特定することなく示すものである。その要素項Xに当てはめられるものは、およそどんな事柄であつてもよく、特にこの項目内容でなければならぬといった事情はどこにも備わらない。そうした意味で、軽少要因性を帯びうると言えよう。ダニもまた、そうした要素を掲げ示しつつ否定と組み合わせることで、「関心の皆無性」を表わすに至ると考えられるであろう(注⑧)。

②は、あまりの無沙汰を恨む歌である。上三句は「浅い」から「あさまし」を導き出す序詞となっている。「爪さへ濡れない(それほど浅い)」の意であろう。鹿の足の濡れぐあいとしては、爪先だけに限られるばあいから脚の付け根まで浸かるばあいまで種々の段階が考えられるが、その中でもっとも度合いの軽いものを挙げるのにダニが用いられている。それに

よって、全体としては「没入度の皆無性」を、ひいては、深さというものの全くの欠如を、表わすことになると考えられよう。

③も、音沙汰の無いことを恨む歌である。伊勢集(二六二)には、「人のおぼつかなくてすぐしけるころ」との詞書とともに収める(第二句「あひみることは」。本文は大観・Ⅲ)。「逢えないのはしかたないとしても、せめて「忘れていない」というメッセージを(手紙でなりと)よこしてくれればよいのに、それさえもない」の意であろう。「忘れず」は、そういうことだけでも解るような消息内容といったほどの意味であろう。ダニはそのような要素を掲げること、音沙汰の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

④も無沙汰を恨む歌である。歌意は「私のことはともかく、庭の花を見ろということのためだけに、あなたはいらつしやらないことだ」といったものである。ここでのダニは、訪問の動機としてより軽い方の要素を示すのに用いられている。最終的にはそれが否定と組み合わせることで、「来訪の皆無性」を表わすことになるわけである(注⑨)。

⑤は、万葉集(十一・二六二)に《夕占にも占にも告れる今夜だに(谷)来まさぬ君を何時とか待たむ》(詠人不知)の歌があり(文献⑫、一四八頁)、その異伝歌とされる。歌意は「夕占によつて吉と出た日にさえ来ないあなたを、いったいいつ来ると思つて待てばよいのか」といったものである。「もし来ることが有りうるとすれば今日を描いてほかには考えられないような、そのような稀な機会であつても来ない」というのが、ここでのダニによつて表わされている意味合いであろう。そうした意味で「来訪の皆無性」を表わすものになつていようかと思われる。

⑥は、詞書に《やむごとなき所にさぶらひける女のもとに、秋頃忍びてまからむと男の言ひければ》とある。秋萩は鹿との結び付きの強い景物として詠まれる(古今・二二六・八)。「しか」を「鹿」で解するなら、鹿が立ち寄る所さえも無いということから、まして人間の立ち寄る所などあり

えないということにもなつて、「来訪可能な場所の皆無性」を表わすものとなつていようし、「然」の意味で解するなら、「こっそり立ち寄る所さへございません」の意となつて、直截な拒絶のメッセージともなるであろう。

⑦は《幽にほのかなりし佛の、忘れがたきをよめる歌》（抄）とされる。単に見たことがあるだけというのは、ゆつくり話し合つて姿形の特徴や態度物腰の雰囲気などを具さに知ることに較べるなら、ほんの僅かな接触到過ぎない。ダニは、そのような要素を掲げることによつて「既知感の皆無性」を表わすに至ると言えよう。歌全体としては、それなのに佛のつきまとうのは、そういう佛を自分で作り上げてしまつたからだろうといったふうに、その事情を了解しようとしている。

⑧は、詞書に《行ひせんとて山に籠り侍けるに、里の人に遣はしける》と記す。拾遺抄（二九〇）ではやや詳しく、《行ひすとて山寺に籠り侍りけるおとこの、女のもとに遣はしける》とある（歌は、第二句「知られで入りし」）。自分の居場所を人に知らせることは、そこからこそ、手紙を遣つたり、来訪を試みたりするといった事柄の生じる出発点であり、いわば「端緒としての輕少性」を帯びる。ダニは、そのような要素を掲げ示すことによつて、「関係の皆無性」を表わすに至ると言えよう。

⑨は、「いかるがにげ」を詠み込んだ物名歌である。歌意は、「どういふことなのかと、その事情を聞き分けることもしないままに、理不尽にも人は怒ることだ。関わり合わずに逃げることにでもしようか」といったものである。状況それ自体を理解することは、他人の事情を斟酌するとかそれに同情するとかいった以前のことであり、自分との関わりを持つ人に対して行なうこととして、もつとも基礎的な事柄であると言えよう。この点に輕少要因性を認めることができる。ダニもまた、そのような要素を挙げ示しつつ、「理解的態度の皆無性」を表わすに至ると言えよう（注⑩）。

⑩は、詞書に《天曆御時、九月十五日齋宮下り侍けるに》とある。村上天皇の第六皇女・樂子内親王が伊勢の齋宮となつて下向する時の歌である。

仮定条件句は「せめて貴女の御代が（この長月にあやかつて）長久であるだけでも思うのでなければ」の意であろう。拾遺抄（二〇一）にも収められており、竹鼻氏は《六歳のおさな児を伊勢に遣わす父親としての天皇の胸中は察するにあまりあ》とされる。ダニはと言えば、条件句の内容として、蜘蛛の糸筋のような幽かな救いを断ち切るさまを表わすのに用いられている。〈相対的輕少性〉の意義がそのように活かされているのだと言えよう。

第三に、次のような例にあつても、それぞれに、ダニの接する語句の輕少要因性を了解することができるであろう。

①春の野に生ふるなきなのわびしきは身をつみてだに人の知らぬよ

（恋一・六九八、不知）

②氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声（春・六、源順）

③植ゑて見る君だに知らぬ花の名を我しもつけん事のあやしき

（物名・三六一、不知。和歌大系では第四句を「告げん」とする）

①は、無実の噂を立てられたことの辛さを詠んでいる。その渦中の人にとって、噂の火が消えることとか、彼を弁護して火消し役を務めてくれる人がいるとか、そういったことがあれば何よりだが、そこまで行かなくても、流言の飛び交う中で、当人の身になつてその窮状を理解してくれる人がいればまだしも救いを見出すことができるであろう。然るに、そういった同情的な態度を見せてくれる人だけでも居ないというのが、ここでの嘆きの中心点である。ダニもまた、そうした意味で輕少な要素を掲げるのはたらく。それによつて、いわば「全き孤立無援性」が表わされるに至るわけである。

②は、詞書に《天曆御時歌合に》とある。古今（一二）の《谷風にとくる氷のひまごに》の歌を考え合わせると、ここでの「谷風」は「氷を融かすもの」としてのイメージが濃いのではないかと思われる。この場合「氷」は、もし冬らしい要素が最後まで残るとすればこれを措いてほかに

ないような数少ない要素であると言えよう。いわば最終残存候補とも言うべきものであって、そうした意味で軽少要因性を帯びるのではないかと思われる。ダニもまたそのような要素を掲げ示すことで、「冬らしさの皆無性」を表わすのにはたらいていよう。温暖な春の谷風の結氷融解作用が、冬のなごりの最後のひとひらとも言うべきものについても、その存在を消し去るわけである。

③は「しもつけ」（花の名）を詠み込んだ物名歌である。植物の専門家やマニアといった場合はさておき、ごく常識的に考えた場合、日常生活において或る花との関わり合いを持たない人にあつては、その花の名前などというものは関心の対象外であつて、それを知らなくても一向に不都合ではないが、花を庭に植えた人というのは関わり合いの当事者なのだから、花の名を知っているということにとっては、その人を措いてほかに誰が居るとも思えないような、数少ない候補であると考えることができよう。ダニは、そのような要素に接することによって、「花の名を知る人の皆無性」を表わすのに与るのだと言えよう。

第四に、以上に見てきたようなものの他に、末尾に「じ」を有する文や否定的な意味を表わす述語で用いられたものが都合四例見える（否定的意志を表わす「じ」とともに用いられたものが他に一例あつたが、それは第一節に⑤として掲げた）。

①露にだにあてじと思し人しもぞ時雨降る頃旅に行きける

（別・三二〇、忠見）

②常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれその数にだに入らじと思へば

（哀傷・一三〇〇、公任）

③惜しむともかたしや別れ心なる涙をだにもえやは留むる

（別・三三二、御乳母少納言）

④これをだに書きぞわづらふ雨と降る涙を拭（のこ）ふいとまなければ

（恋五・九五九、不知）

①は、詞書に《十月許に物へまかりける人に》とある。上三句は、「露にだつて当てまいと思つて大切にしていた（よりによつて）その人が」の意であろう。害悪をごく少なくしかもたらさない要素を掲げるのにダニが用いられている。それと否定の意志とが組み合わさること、損傷の皆無性を期する表現になっていると言えよう。

②は、藤原為頼が《世中にあらましかばと思人なきが多くも成にける哉》と詠みかけてきたのに対する返歌である。為頼歌の詞書には《昔見侍し人く多く亡くなりたることを嘆くを見侍て》とある。栄花物語（みはてぬゆめ。小学館・新編①、二二四頁。但し、第四句「なきは」によれば、為頼の歌は長徳元年（九九五年）の疫病流行で貴顕の相次いで歿したのを悼んで詠まれたものとなつてゐる。また為頼集（二五）では《小野宮（＝実頼）の御き日に、法住寺にまゐるとて、おなじほどの人のおほくまありしを思ひいでて》との詞書のもとに収められている（注⑪）。公任歌の「その数」は、そうした貴顕たちのことを頭に置いたものであろう。常識的に考えれば、物故せずに済んだ人は幸いなはずであるが、ここではそれ以下の人間として受け止められている。ダニもまた、そうした意味での軽少要因性を明示することで、「存在意義の皆無性」を表わすに至ると言えよう（注⑫）。

③は、詞書に《同じ御乳母（＝肥後）の「出羽へ行く時の」餞に、殿上の男ども女房など別れ惜しみ侍けるに》とある。「いくら惜しんでも人の旅立つのを留めることは難しいことだ。思うままになりそうな自分の涙さえも止めることができないのだから」といった趣意の歌である（注⑬）。留めることを阻害する要因をより少なくしか備えていない要素を示すのにダニが用いられている。そこに反語による翻りが重なることで、抑止することの「全的な不可能性」が表わされるに至るわけである（注⑭）。

④は、「涙がとめどなく流れて来るので、この手紙を書くといった、そんな簡単なことも出来かねている」の意であろう。それほどにも悲嘆に暮

れているわけである。述語「わづらふ」が表わすのは、ある事柄を行なうことが著しく困難だということであり、否定に近い意味を表わすと見なすことができよう。他方、ダニはと言えば、着手実行を難しくする要因をより少なくしか備えない要素を掲げ示すのに用いられている。そこから、「まして、より多くの力を必要とする他のことなど、およそ行ない得ない」といった皆無性の意味もまた汲み取られるに至ると考えられるであろう。

こうして、否定述語とともに「たらくダニ」にあつても、「小」なる要因を提示しつつ否定と組み合わせることで「皆無性」の表現に参加しているありさまが觀察されるであろう。そのような形で〈相対的輕少性〉の意義が発揮されているわけである。

三 類推表現

類推表現に用いられたダニは十五例見える。一般に類推表現で用いられる場合、ダニは、「小」なる要素においても事柄の成立を表わすのにはたらし、それによつて類推の基盤となる事柄が形成される。〈相対的輕少性〉の意義がそのように供されるのだと言えよう。これらは、二つの事態の示され方の面から、さらに次のように分けておくことができる。

- a…典型的類推構文 一例
- b…準典型的類推構文 五例
- c…暗示的類推構文 九例

第一に、a…〔典型的類推構文〕に属するのは、次の一例である。

- ①こゝにだにつれ／＼に鳴く郭公まして子恋の森はいかにぞ

（哀傷・二二八二、重光）（注⑮）

①は、詞書に《右兵衛佐惟賢（＝伊尹次男）まかり隠れにけるに、親のもとに遣はしける》とある。「私のようなものでさえも空しい思いで泣いているのですから、まして実の子に先立たれたあなたの場合はどれほど悲

しいことでしょう」といった意味合いが詠み込まれている。ダニは、悲しみの気持ちを抱く素地を相対的に少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。そこから、より切実な事情を背負った人における悲嘆の大きさを思い遣ることにもなるわけである。この歌では、類推における昂進性が「まして」によつて明示されている。そうした意味で典型的類推構文を形作つていると見ることができよう。

第二に、b…〔準典型的類推構文〕を形作るものとしては、次の五例が挙げられる。

- ②逢ひ見ては死にせぬ身とぞなりぬべき頼むるにだに延ぶる命は

（恋一・六九二、不知）

- ③天河のちの今日だにはるけきをいつとも知らぬ舟出悲しな

（雑秋・一〇九三、公任）

- ④こゝにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやられる

（秋・一七五、藤原経臣）

- ⑤九重の内だに明かき月影に荒れたる宿を思こそやれ

（雑秋・一一〇五、善滋為政）

- ⑥霜置かぬ袖だにさゆる冬の夜に鴨の上毛を思こそやれ

（冬・二三〇、公任）

②は、「逢おうと約束してくるだけでも命が延びるのだから、まして実際に逢つて下さるなら不死の身となつてしまふさうだ」といった趣意の歌である。ここでのダニは、生命力を増進する要因をより少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。そうすることによつて、長寿招来効果をめぐる類推基盤事態が形作られるわけである。もはや「まして」のよりに昂進性を明示する言葉は見えないが、類推の基盤となる事柄と類推される事柄とは揃つて言葉に表わされている。そうした意味で、準典型的類推構文と呼ぶことができよう（注⑯）。

- ③は、詞書に《寂昭が唐（もろこし）にまかり渡るとて、七月七日舟に

乗り侍けるに、言ひ遣はしける」とある。歌意は「一年後に逢えると解っているときでさえ、待つ間は遙か遠くに感じられるのに、まして今日の船出は後会いつとも知れないのだから、悲しい限りだ」といったものである。離別の悲しみをもたらず要因をまだしも少なくしか備えていない要素を掲げるのにダニが用いられている。それを基盤としつつ、現在時点における別れの限らない悲哀へと表現が進むわけである（注⑬）。

④も基本的には右と同じであるが、類推の思惟をめぐる形式面（思ふ）の言葉にされている点が特徴と言えは言えるであろうか。④は、詞書に《延喜御時、八月十五夜藏人所の男ども月の宴し侍けるに》とある（注⑭）。歌意は、「私どもの如き卑い身分のところであつても澄み切った月の光がさしてくる。まして陛下の御前でさやけさはどれほどであるのかが思い遣られる」といったものであろう。ここでもダニは、月の光の清らかさをより少なくしか期待できない場合を示すのに用いられている。それを足場とすることで、よりいっそうその期待できる場合へと、思いを馳せることになるわけである。

⑤は、「九重に覆われている宮中であつても月の光が明るく射している。まして遮るものなく射しこむ我が陋屋はいかほど明るいことかと思いを馳せてしまふ」といった意味の歌である。ここでも、これまでと同様のダニのはたらき方が見て取れよう。月の光が射し込むということをめぐって、その受け入れ易さをより少なくしか備えない要素を示すのにダニが用いられているのだと言えよう。

⑥は、冬の夜の寒さを詠んでいる。歌意は「霜の置かない袖であつても冴え切ってしまう冬の夜に、霜を払いのけることもできない鴨の上毛はどれほど寒いことだろう」というものである。ここでもダニは、「寒さ」というものがより少なくしか備わらない要素を示すのに用いられている。そこから、それをより多く備える場合へと、類推による想像力を羽ばたかせていると言えよう（注⑮）。

第三に、c…〔暗示的類推構文〕で用いられたものは九例見られる。これらはさらに、次のように分けておくことができる。

イ…基盤事態単独タイプ 三例

ロ…反戾事態提示タイプ 六例

まず、イ…〔基盤事態単独タイプ〕のものは、次の三例である。そこでは類推の基盤事態だけが示され、類推事態は読み手の理解に俟って暗示されるに留まる。そのような場合でも、類推事態がはっきりと汲み取られる限りに、類推表現としてのあり方は失なわれなと言えよう。

⑦雲井にてあひ語らはぬ月だにも我が宿過ぎてゆく時はなし
（雑上・四三七、伊勢）

⑧老いが世にうき事聞かぬ菊だにも移ろふ色は有けりと見よ
（雑秋・一一三二、不知）

⑨いかなりし時呉竹の一夜だにいたづら臥を苦しといふらん
（恋三・八〇四、不知）

⑦は、詞書に《参議玄上（はるかみ）が妻の、月の明き夜門の前をわたるとて、消息いひ入れて侍ければ》とある。一首の意は、「遠く遙か雲の上に居る月であつても私の家に宿らずに過ぎるということはありません（それなのに親しい貴女は立ち寄りもせずただ通り過ぎるだけなのですね）」といったものであろう。ダニは、親密さの度合いをより少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。類推義は言葉俟たずして明らかであろうし、それに相反する現実の事態も詞書からそれと察知される。そうした意味で暗示的類推構文を形作っていると言えよう。へ相対的輕少性への意義も、そうした表現の中で發揮されるわけである（注⑯）。

⑧は、詞書に《物ねたみし侍ける男、離れ侍て後に、菊の移ろひて侍けるを遣はすとて》とある。「老年になつても辛いことを聞かないとされる菊の花でも、色が変わってしまうことをとくと御覧下さい」といったメッセージである。「まして、移ろいやすい男女の仲では、それは避けること

ができないでしょう」の含みははつきりと読み取ることができる。そうした中でダニは、「うつろい」をもたらす要因をより少なくしか備えていない要素を示すのに用いられている。〈相対的軽少性〉の意義においてそれがなされるわけである。

⑨は、恋の廃墟を詠んでいる。歌意は、「空しく一人で寝るのはほんの一夜であつても苦しいといった、そんな熱い思いを抱いていたのはいつた何時のことだったのだろう」といったものである。「一夜」が軽少な要素であることは詳言を須いない。逢えないことの苦しみをもたらす要因をより少なくしか備えない場合としてそれが示されるわけである。「ましてそれ以上の日数ではどれほど苦しいか測り知れない」といった類推義は説かずして明らかであるが、実際にはそれが紛う方なき現実であることもまた言外に汲み取られる。「いかなりし時——らん」の打ち合いによつて、かつてのありようが謠のようだといった意味合いが示されることで、そうなると言えよう。ダニは、そうした意味での暗示的類推構文に参加しつつ、基盤事態形成に与るわけである。

他方、ロ・「反戾事態提示タイプ」に属するものとしては、次の六例が挙げられる。類推義が言葉に言い表わされない点では先のイと同じであるが、こちらではさらに、それと相反する事態が言葉に示される。このような場合も、類推義が暗示に俟って汲み取られるという点は先の場合と変わらない。その意味で、暗示的類推構文と受け止めておいてよからう。

⑩衣だ中に有しはうとかりき逢はぬ夜をさへ隔てつる哉

（恋三・七九八、不知）

⑪水底に宿る月だに浮かべるを沈や何のみくづなるらん

（雑上・四四一、済時）

⑫うつろはむ事だに惜き秋萩を折れぬ許も置ける露哉

（秋・一八三、伊勢）

⑬心もて散らんだにこそ惜しからめなどか紅葉に風の吹らん

（秋・二〇九、貫之）

⑭朝ごとに払ふ塵だにある物を今幾世とてたゆむなるらん

（哀傷・一三四一、不知。拾遺抄・五七八では、初句「年を経て」）

⑮春霞立な隔てそ花盛り見てだに飽かぬ山の桜を（春・四二、元輔）

⑩は、「かつて熱い仲だった時は、二人の間を隔てるものが、衣のような薄いものであつても、ただそれだけでも疎ましいものに思えた。この時の状態からすれば、まして、逢わぬ夜を隔てるなどというのはどれほど厭うべきものであるか測り知れないはずであるが、今ではそれが紛れもない現実になつてしまっている」といった意味合いを詠み込んでいる。先の⑨がそうであつたように、ここでも恋の廃墟が主題となつている。違いはと言えば、類推義を踏まえつつ、それと相反する事柄が後続部に示されていることであろう。そうした中であつてダニは、「うとし」という思いをより少なくしかもたらさない要素を掲げ示すのに用いられている。それによつて基盤事態の形成に与るわけである（注⑫）。

⑪は、詞書に《廉義公（＝頼忠・実頼子息）後院に住み侍ける時、歌詠み侍ける人々／＼召し集めて、水上秋月といふ題を詠ませ侍けるに》とある。作者済時（師尹子息）は頼忠の従兄弟にあたる（注⑫）。歌意は、「水底に宿る月であつてもやはり水面に浮かんでいるものなのに、水中に沈みこんでいるのはいったい何の水屑なのだろうか」といったものである。「浮かぶ」というあり方を相対的に持ちにくい要素を掲げるのにダニが用いられている。そこから、ましてそれ以外のものは云々の類推義が想定できるが、実際の言葉では、それに相反する事柄のほうに詠み込まれているわけである。

⑫は、詞書に《亭子院御屏風に》とある（拾遺抄・一二二では、「扇院の御屏風の絵に」）。歌意は「秋萩の色が褪せるだけでも惜しいのに、今にも折れそうに露が重く置いてることだ」といったものであろう。ダニは

「惜し」と思わせる要因を相対的に少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。後統部はより大きな要因を示しているのだから、準典型的な類推の表現とも見られるが、「惜し」という思いに込められた価値意識からすれば、これ以上花を傷めつけることは何としても押しとどめたいということであって、花に置く露は、その願いにも似た気持ちを逆撫でするものにほかならない。そうした意味で、反戾事態の提示になっていると受け止めることができるのではないかと思われる。

⑬は、「美しい紅葉が自分から散るというだけでも惜しいのに、どうして無理やり散らせるかのように風が吹くのだろう」といった趣意の歌である。古今（八五）の《心づからや移ろふと見む》が想起されよう。ここでも、先と同じような意味で、反戾事態の提示がなされている。ダニもまた、そうした中であって、「惜し」と思わせる要因をより少なくしか備えない要素を掲げるのに用いられていると言えよう。

⑭は、詞書に《行ひし侍ける人の苦しくおぼえ侍れば、え起き侍らざりける夜の夢にをかしげなる法師の突きおどろかして詠み侍ける》とある。歌意は、「朝ごとに払う塵のようなものであっても怠るのはよくないのに、まして後世を願うための行いが忽ち付されてよいわけがない」といったものであろう（注⑳）。ここでもダニは、「たゆむ」ことの不都合さを相対的に少なくしか備えない要素を示すのに用いられている。後統部では、より不都合な事柄が、それに対する疑念を込めて示されていると言えよう。

⑮は、詞書に《天曆御時、麗景殿女御と中将更衣と歌合し侍けるに》とある。この歌の場合、「飽かぬ」は全体で「嫌ない」といった一つの述語と見ることができよう。ダニは、そうした状態をもたす要因をより少なくしか備えない要素を示すのに用いられていると解される。類推義は「まして隠されると、それ以上に嫌ない」であるが、花盛りを見たいという話者の気持からすれば、やはり背反的な事態であり、だからこそ禁止表現を伴う形で示されているのだとも考えられよう。そうした意味で、暗示的

類推構文としてのありようを見て取ることができるのではないかと思われる（注㉔）。

こうして、類推表現に参加する場合にあっても、ダニは、様々なあり方において基盤事態を形成するのに与るありさまが見て取られるであろう。《相対的軽少性》の意義が、そのような形で発揮されていると考えられるわけである。

むすび

以上、『拾遺和歌集』に見えるダニについて、その使われ方を見てきた。これによって、《相対的軽少性》という基本的意義が、ダニの総ての用例において備わることが確かめられたのではないかと思われる。要点を再述すれば、①願望表現や②仮定条件句にあつては、その内容を低い段階へと引き下げることによって「せめてもの願い」や「最低十分条件」を表わすのに与り、③否定述語においてはそれをしも退けるものとして「小」なる要素を提示することで「皆無性」の表現に加わり、④類推表現に際しては「小」なる要因においてもの成立を表わすことで類推の基盤事態を形作るのに参加していたのだと言えよう。この文献におけるダニは、以上のような意味合いにおいて、《相対的軽少性》の意義を有すると認めることができるであろう。

この語の副助詞性ということも、こうした基本的意義と一体のものとして捉えることができる。この語は、他の事項との関係を表わす点で群数性を備えるとともに、その関係規定が二事項間の軽重差に基づくという限りに程度量性をも帯びるのであって、こうした二つの性質を融合的に併せ担い持つ点に、副助詞としてのあり方をはっきりと認めることができるのだと言えよう。

冒頭でも触れたように、中古のダニについて右のような考え方のもとに

これまで観察を試み、勅撰集では古今や後撰の調査を行なってきた。本稿ではその継続作業として、この第三勅撰集へと探索の歩を進めてみたのであった。

〔付記〕『拾遺和歌集』の本文は次の文献に依った。

- ・新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦校注 一九九〇 岩波書店）

用例の掲出に際しては、次のような行き方を取った。

- ・末尾に（部立・大観番号、作者）を記した。
 - ・作者名は「紀貫之↓貫之」のように適宜節略した。
 - ・「よみ人知らず」は「不知」で示した。
 - ・歴史的仮名遣いが傍書されているものはそれに従った。
 - ・読み仮名を（ ）に括って示した場合がある。
 - ・引用者による注解を適宜（ ）に括って示した。
- 歌の解釈に際しては、次の書物を参考した。

- ・北村季吟『八代集抄』（山岸徳平編『八代集全註』第一卷 一九六〇 有精堂）〔原著の拾遺集註解部分は延宝七（一六七九）年八月から同年十一月までであり、後撰集に先立つて書かれている〕
- ・和歌文学大系『拾遺和歌集』（増田繁夫校注 二〇〇三 明治書院）
- ・竹鼻 績『拾遺抄注釈』（二〇一四 笠間書院）
- ・私家集注釈叢刊『公任集注釈』（竹鼻 績 貴重本刊行会 二〇〇四）
- ・私家集注釈叢刊『能宣集注釈』（増田繁夫 貴重本刊行会 一九九五）
- ・私家集注釈叢刊『躬恒集注釈』（藤岡忠美・徳原茂実 貴重本刊行会 二〇〇三）

私家集本文の引用は、特に断らないかぎり（右の注釈書に収められたものも含めて）すべて新編国歌大観（第三巻）に依った。
歌語の検索には次の索引類を用いた。

- ・西下経一・滝沢貞夫『古今集総索引』（一九五八 明治書院）
- ・大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集総索引』（一九六五 大阪女子大学）
- ・片桐洋一『拾遺和歌集の研究』（伝本・校本篇）〔索引篇』（一九七〇・七六 大学堂書店）

『大和物語』『栄花物語』『大鏡』などは、それぞれ次の本文を用いた。

- ・新編日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（高橋正治ほか校注訳 小学館 一九九四）
- ・新編日本古典文学全集『栄花物語①』（山中裕ほか校注訳 小学館 一九九五）
- ・新編日本古典文学全集『大鏡』（橘健二・加藤静子校注訳 小学館 一九九六）

これらの書物の引照に際しては、「新大系」「抄」「和歌大系」「索引」「新編」等々の略称を適宜用いた。なお、文献⑬では拾遺集のサへについて論じている。併せて御参照いただければ幸いである。

注

〔注①〕文献②（一七二頁）には、八代集タニの用法別用例数が【表4】としてまとめられている。その合計数を算えて示すと、次表のようになる。

【表】

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
	三七	五九	五二	六六	一八	一〇	五〇	七七

〔注②〕副助詞性についてのこのような見方は文献⑮に依る。この見方を取るこの意味については文献⑩の「むずび」参照。

〔注③〕なお、この歌は大和物語（九二段）にも収められている。初句は「いかにして」、末句は「君に聞かせむ」である（本文は小学館・新編）。

(注④) 大中臣能宣がこれに和した歌も、この歌の次に収められている。なお順は、翌・応和二年に東宮の蔵人となり、さらに式部卿となった。そのときの喜びを詠んだ歌も源順集(一八九)に残されている。

・引く人もなしとわびつるあづさ弓今ぞうれしきもろやしつれば

(注⑤) この挿話は、流布本大鏡にも載せられていて著明であろう(小学館・新編、二二六頁)。愚管抄では、その場面を次のように述べている(旧大系・一六二―三頁。原文正漢字)。

・《兼通が》「右大将〔兼家〕ハキクワイノモノニ候。メサレ候ベキ也。大将所望ノ人ヤ候。ハカラズ申セ」トタカクイハレケルニ、タレカハサウナク申サン。ヲソレテアリケルニ、小一条大臣師尹ハ、九条殿ノ御弟ナリ。ソノ人ノ子ニ濟時トテ中納言ナル人アリケリ。コノ人オモヒケルヤウ、「コノトキナラデハ、イツカワレ大将ヲユルサレン申テン」ト思テ、カサネテ、「イカニ大将所望ノ人ノ候ハヌカ、タマ申セ」トイハレケルタビ、濟時トタカク名ノリイダシタリケレバ、「メデタシ、トク」トテ、右大将ニ濟時トカキテゲリ。

(注⑥) なおこの歌は、天徳内裏歌合に能宣作として見え、能宣集にも見えるため、作者は源順ではなく能宣であろうとされる(増田氏・能宣集注釈(三三〇)。竹鼻氏・拾遺抄注釈(二六五))

(注⑦) 新大系では《身の程も弁えず、いいかげんな恋愛事とも思われないで》の意と取っているが、「くだに……否定」は、小なる要素を掲げつつ、それさえも無いことを言うことで、より小なるものとしての「無」へ向かうというのが一般であると考えられるので、試みにこのように解してみよう。

(注⑧) 新大系では「見ず」の主語を相手と取って《あなたは私のことを、難波の「なに」、何とも思わずに、目もくれないことだ》の意とするが、和歌大系は「見ず」の主語を詠み手と取って《私はあなたのことを何とも思わない》とする。ここでは姑く後者に従って解しておいた。前者の解でもダニが軽少要因提示にはたらくこと自体は変わることなく認められよう。

(注⑨) 竹鼻氏は、④の歌が伊勢集に見えないことを指摘したうえで、次の歌との類想性を指摘している(拾遺抄・四四六)。

・我をこそわすれもはてめむめのはなさしぞとだにおもひいでなむ

(伊勢集・二二四、本文は大観・Ⅲ)
なお、後撰には次の歌があつて(文獻⑪、一四〇五頁)、下句の発想の仕

方が似ている。

・心もて居るかはあやな梅花香をとめてだにとふ人のなき

(春上・二九、不知)

また、後拾遺の次の歌は上の句に類似的の発想が見られる。

・逢ふことはさもこそ人目かたからめ心ばかりはとけて見えなむ

(恋一・六三三、道命法師)

(注⑩) 新大系では第四句を「人のいかるが」とし、意味の面でも《むやみに人が怒るので》と続けるが、和歌大系は「いかるか」で切つて、《不条理にも人の怒ることよ》と解している。ここでは、「も——か」の打ち合い(「あゆひ抄」文獻⑭、一二四頁)を重んじて、後者に従うことにした。藤岡・徳原「躬恒集注釈」(二四二)でも同様である。

(注⑪) 竹鼻氏(文獻⑤・六四―五頁、拾遺抄注(五七二)、公任集注釈(二一九)など)によれば、為頼の歌は長徳二年五月十八日(実頼の忌日)に、法性寺の東北院(小野宮家の氏寺)で仏事の営まれたときの作とされる。前年五月の疫病の猛威を想い起こしながら詠まれたわけである。また「常ならぬ」の歌が、元来は小大君の歌であつたであろうことも推定されている。

(注⑫) なお後拾遺集(九〇〇)に次の歌があつて、発想の仕方が似ている。

・数ならぬ身のうきことは世の中になきうちにだに入らぬなりけり(小弁)

(注⑬) 後拾遺集(八八四)に次の歌があつて、「涙」が統御可能なものと考えられていた事情が窺われる。

・わりなしや心になかなみだだに身のうきときはとまりやはする(源雅通)

「心になかな」が「命」についても云われることは、古今(三八七)の「しろめ」の歌によつて著名であろう。他方「心なる」の云い方は、金葉集(二二二)に次の歌が見える。

・聞きもあへず漕ぎぞわかる、時鳥わがこゝろなる舟出ならねば
大江匡房が美作守に赴任するときに中原高真の詠んだ歌である。公務出張だから船出の時刻を遅らせるわけにもゆかないとの意であろう。

(注⑭) 歌全体としては、「涙→人」という方向で類推の構造を見て取ることもできるが、落涙を禁じ得ぬという点に主眼があるとも考えられるので、反語と関わる部分だけを扱っておいた。

(注⑮) 作者は、拾遺集では「右大臣」と記されているが、一条摂政御集(五

（二）の次のような詞書から「源重光」ではないかとされる。

・《のぶかたのきみうしなひたまたるに、ちじの大納言と、のちのよにはきこえし、しげみつのきみ》

重光は、惟賢の母方の伯父にあたる。重光の父は代明親王（醍醐天皇子）であり（因みに母は定方息女）、妹の恵子女王が惟賢の母であった。

（注16） 竹鼻氏は初句を「見ては」と読む可能性を指摘している（拾遺抄・二四五）。

（注17） なおこの歌は後拾遺集（四九七）にも重ねて出てくる。公任集では末句「我ぞ悲しき」（五一五）である。

（注18） 拾遺抄（一一六）の詞書には《後涼殿のはさまにて》とあり、和歌大系では、それを「東の簀」と解している。

（注19） 和歌大系は後撰集（四六〇）の次の歌を引く。

・冬の池の鴨の上毛に置く霜の消えて物思ころにもある哉（不知）
なお、公任集（二一〇）の詞書は《だいいあまたして歌よみけるに》である。

（注20） なお後拾遺集（九六八）の次の歌もよく似た仕立て方になっている。

・天の原はるかにわたる月だにも出づるは人に知らせこそすれ

（藤原道信）

（注21） 後続部のサへについては、文献⑬（七八頁）で扱っている。

（注22） 病を押して参内した兼通が、関白を頼忠に譲り、兼家から取り上げた右大將を済時に与えたエピソードについては（注⑤）参照。

（注23） 「だにある」の解は、和歌大系に《おろそかにすべきでないのに》とあるのに依った。

（注24） 「飽く」という語は、否定と共に用いられることが極めて多い。古今集では全二十八例のうち二十三例が未然形であり、そのうち二十二例までが否定（ず、で、なくに、など）と結びついて用いられている。また後撰集では全十六例のうち十五例までが「飽かず」「飽かぬ」「飽かで」などの形を取る。さらに拾遺集でも、全二十九例（異本歌一例を除く）のうち、二十四例（当該歌一例を含む）までが未然形で否定と結びついている（調査は各索引による。拾遺集には後撰との重出歌（二〇八四）や、明らかに万葉歌の異伝と認められるもの（五六九、五七〇、八五七、一一一五）なども含まれるが、それらは除外していない）。こうした使用状況をふまえれば、この語を「嫌ない」といったひとまとまりの意味で受けとめることは、無理なく肯われるであろう。文献⑧（一〇〇頁）でも、

大鏡に見える伊尹の次の歌についてそうした解釈を試みた。

・さは遠くうつろひぬとかきくの花折りて見るだに飽かぬ心を（小学館・新編、一七四頁）

文献⑩（一五六―七頁）では、古今の次の歌を否定述語として扱ったが、右のような事情を考えれば、「飽かぬ」を「嫌ない」の意のひとまとまりの述語と見るほうがよいかと思われる。その場合、ダニは、準典型的類推構文ではたらくということになる。

・うばたまの夢に何かはなぐさまむ現にだにも飽かぬ心を（物名・四四九、深養父）

参考文献

- ① 尾上圭介（一九八三）『不定語の語性と用法』（渡辺実編『副用語の研究』明治書院）〔尾上圭介（二〇〇一）『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版）所収。引照は後者による〕
- ② 衣畑智秀（二〇〇五）『副助詞ダニの意味と構造とその変化―上代・中古における―』（『日本語学』五卷一号）
- ③ 鈴木ひとみ（二〇〇五）『副助詞サエ（サヘ）の用法とその変遷―ダニとの関連において―』（『日本語学論集』一号（東京大学））
- ④ 竹岡正夫（一九七三）『かざし抄新注』（風間書房）
- ⑤ 竹鼻 績（一九七〇）『公任集考―成立の問題を中心として―』（『言語と文芸』一二卷二号（東京教育大学））
- ⑥ 田中敏生（二〇〇七）『蜻蛉日記』における副助詞ダニの諸用法とその連関―〈相対的輕少性〉の意義に基づく統一的理解の試み―（『四国大学紀要』（人文）二八号）
- ⑦ 田中敏生（二〇〇八）『枕草子』の副助詞ダニ―中古における〈相対的輕少性〉の意義の一確認―（『四国大学紀要』（人文）三〇号）
- ⑧ 田中敏生（二〇〇八）『大鏡』の副助詞ダニ―平安時代における〈相対的輕少性〉の意義の一確認―（『言語文化』六号（四国大学））
- ⑨ 田中敏生（二〇一五）『今鏡』の副助詞ダニ―平安末期和文における〈相対的輕少性〉の意義の一確認―（『四国大学紀要』（人文）四五号）
- ⑩ 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞ダニ―〈相対的輕少性〉の意義をめぐって―（『四国大学紀要』（人文）三八号）

- ⑪ 田中敏生（二〇一五）『後撰和歌集』の副助詞タニ―平安朝和歌における〈相対的軽少性〉の意義の「確認」―『言語文化』十三号（四国大学）
- ⑫ 田中敏生（二〇一四）『万葉集』の副助詞タニ―上代における〈相対的軽少性〉の意義の確認―『四国大学紀要』（人文）四二号
- ⑬ 田中敏生（二〇一三）『拾遺和歌集』の副助詞サヘ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の「確認（其二）」―『四国大学紀要』（人文）四〇号
- ⑭ 中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆひ抄新注』（風間書房）
- ⑮ 森重 敏（一九五四）『群数および程度量としての副助詞』『国語国文』二三卷二号

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）